

山頭火句集  
『草木塔』  
ができるまで



山口市小郡文化資料館

〒754-0002 山口県山口市小郡下町609-3

TEL 083-973-7071 FAX 083-973-7091

ホームページアドレス <http://cmogori.cc-net.jp/>

種田山頭火は、明治15（1886）年、山口県防府市に生まれる。大正2（1913）年に荻原井泉水が主宰する「層雲」に出句し、大正5（1916）年には俳句の選者に選ばれる。その後、弟や近親者の死が続けざまに起こり、大正15（1926）年、「解くすべもない惑ひを背負うて、行乞流転の旅に出た。」

各地を転々としながら安住の場所を探して旅を続け、師や句友たちの協力もあり、昭和7（1932）年9月20日に小郡の矢足へ結庵し、其中庵の主になる。



企画展関連年表

昭和5（1930）年	12月25日	熊本に仮寓「三八九居」を得る。
昭和6（1931）年	2月2日	雑誌「三八九」第一集を発行する。
	6月上旬	仮寓「三八九居」を引き払う。
昭和7（1932）年	1月	友人たちに結庵願望があることを手紙で知らせる。
	4月1日	「層雲」第21巻第12号に「結庵基金募集趣意書」が掲載される。
	5月24日	川棚に宿泊する。
	5月29日	福岡県糸田の木村緑平宅で川棚に結庵したいと告げる。
	6月1日	川棚に宿泊する。
	6月20日	第二句集「鉢の子」刊 発行人は木村緑平、三宅酒壺洞（装丁は内山北朗）
	7月12日	伊東敬治が謄写版を贈る。
	8月27日	川棚での結庵定住が果たせず、小郡の国森樹明宅を訪問する。
	8月28日	柳井田の武波憲治の裏座敷に住まう。
	8月30日	国森樹明の案内で矢足の廃屋を下見する。
	9月20日	「其中庵」の庵主となる。
昭和8（1933）年	3月18日	広島の大山澄太が来庵。
	9月16日	大山澄太宅にて句稿の整理をする。
	12月3日	第二句集「草木塔」刊 友人たちに第二句集完成の手紙を出す。
	12月9日	午後、「草木塔」を持って澄太来庵。

## ◆『草木塔』ができるまで

### 大山澄太との出会い

以前から山頭火に関心があった大山澄太は『層雲』を通して其中庵に住み始めたことを知り昭和8年3月に山頭火を訪ねる。

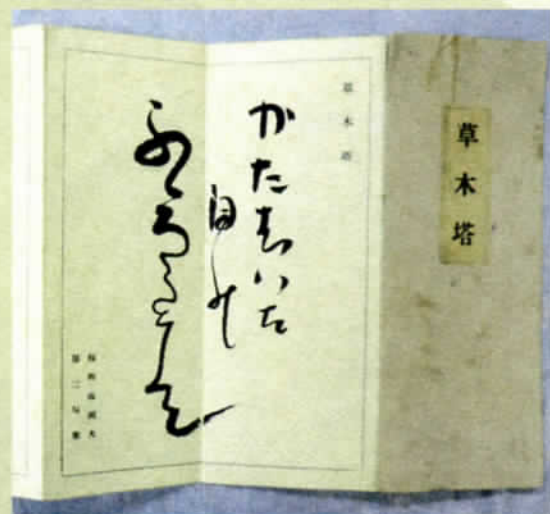
「初めて小郡の其中庵を訪ねて一泊した時、山頭火から一冊貰った。その時、大胆にも次には私が出してあげようかと話しかけたところ、彼はうん、たのむと来た。」

『山頭火の宿』大山澄太著（昭和59年7月、彌生書房）より抜粋

### 第二句集『草木塔』の完成

山頭火は、昭和8年9月15日に大山澄太宅にはじめて訪れ、翌16日には澄太宅にて第二句集に掲載するための句を整理した。その日の夜には横畑黙壺も合流し、3人で杯を重ねながら句集について語り合った。この時、句集の題名には山頭火が考えた『草木塔』が採用される。18日には半日かけて句稿を更に推敲し、澄太に手渡した。

完成した第二句集『草木塔』は経本仕立て、発行部数は300部、定価は75銭であった。12月9日の午後に澄太が来庵し、山頭火に句集を届けた。



## ◆其中庵にたどりつくまでの足跡

### 熊本時代の住処

昭和5年の秋の暮れ、山頭火は友人である木村緑平のもとを訪れた際に「歩くのが嫌になった」とこぼしている。その年の12月には熊本に仮寓『三八九居』を得て半年程を過ごす。

### 第一句集『鉢の子』ができるまで



「結庵基金募集趣意書」

『層雲』第21巻第12号（昭和7年4月号）  
（山口県立山口図書館所蔵）

結庵資金を募る際、寄付してくれた人に配布する目的で作られた句集が『鉢の子』である。師の荻原井泉水が選句し、友人たちが発行した。

山頭火の手元に届いた『鉢の子』には誤植があり、几帳面な性格の山頭火はそれが気になっていた。そこで友人の伊東敬治が謄写版を贈り、誤植箇所を修正する。

当館にはこの時の謄写版が残っている。



その後、川棚での結庵が白紙になった際、小郡の国森樹明や友人たちの協力により、小郡の矢足にある廃屋を修繕し、其中庵と名づけた。

昭和7年9月20日種田山頭火は長い旅の末、其中庵の主となったのである。

この図は山頭火の心友久保白船師の描くところである

白船

昭和十六年三月七日、茂島、松本師、松尾の門を叩き、徳山

白船師の老居を訪ふ。その夜、徳山は「大妻の語る山頭

火の鉄鉢を飾る。この図はその時描いて下さったものである。翌朝、公明

の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として

贈る。白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

白船師は、その夜、向うの徳山に「徳山は、その時描いて下さったものである。翌朝、公明の鉄鉢を飾る。これは、徳山が「大妻の語る山頭火の鉄鉢を飾る」として贈る。

久保白船



### 〔要約〕

#### 〔其中庵道程図〕

一草庵時代の山頭火を支えた高橋一洵は、昭和16年3月8日に山頭火の心友、久保白船宅を訪ね、白船夫婦の語る山頭火の話を楽しんだ。地図はその時に白船が描いたものである。

その年の5月に白船が没し、一洵は一草庵の銀杏が色づく頃に再び白船宅を訪ね、夫人を見舞う。

昭和16年11月9日、白船の描いた地図を頼りに小郡の其中庵に向かう。

その時持ち帰った品の一部が、大理石の寝牛の像とランプである。

書、高橋一洵（1899～1958年）

松山高等商業学校（現在の松山大学の前身）の教授で、山頭火が松山の「一草庵」に入る際に支援した。

絵、久保白船（1884～1941年）

山頭火とは山口中学在学以来のつきあいで、共に萩原井泉水が主宰する「層雲」を通して友情をより深める。山頭火は松山の「一草庵」に向かう途中、白船宅を訪ね、長い行乞生活の中で使ってきた鉄鉢を託す。